

# インタビュー形式の発話における 日本語学習者の義務表現使用について —「初級文型の硬直化」の観点から—

遠藤 直子

## 要 旨

日本語教育の初級で導入される文型の中のひとつに義務表現（～なければならぬ等）がある。本稿では初級の日本語教育教材で取り上げられる義務表現を「初級義務表現」と称し、日本語学習者が使用する義務表現を「NNS義務表現」、日本語母語話者が使用する義務表現を「NS義務表現」と称する。日本語学習者が「初級義務表現」の形式の影響を受け、話しことばの「NS義務表現」の形式を使用することが難しいのではないかという仮説を立て、日本語教育教材の調査とともに、インタビュー形式の話しことばコーパスのデータを用いて調査を行うこととした。本調査の結果、NSとNNSの義務表現の使用傾向に違いが見られ、NNSが「NS義務表現」の形式を十分使用できていないことが判明した。この結果から、本稿は「初級文型の硬直化」（遠藤 2008）が初級文型の意味・用法だけでなく、形式選択の上でも起きていることを指摘し、学習者が中級レベル以降もさまざまな場面に応じた義務表現形式使用に気づく機会をもうけることを提案する。

## キーワード

初級義務表現の形式 NS義務表現 NNS義務表現 初級文型の硬直化  
インタビュー形式の話しことばコーパス

## 1. はじめに

日本語教育の初級で導入される文型の中のひとつに義務表現「～なければならない」（以下、～なければならぬ等）がある。義務表現のバリエーションとして、そのほかにも「～なければいけない」「～ないといけない」（以下、～なければいけぬ等、～ないといけぬ等）などがあるが、筆者は初級の日本語教育教材で取り上げられる義務表現を「初級義務表現」と称し、日本語学習者（便宜上、非母語話者とし、以下、NNS）が主に使用する義務表現を「NNS義務表現」、日本語母語話者（以下、NS）が主に使用する義務表現を「NS義務表現」と称する。本稿では、NNSが日本語教育教材で取り上げられている「初級義務表現」の形式の影響を受け、話しことばの「NS義務表現」の形式を使用することが難

しいのではないかという仮説を立て、日本語教育教材の調査とともに、インタビュー形式の話しことばコーパスのデータをもとにした調査を行うこととした。調査に使用したコーパスは、インターネット上に公開されている「インタビュー形式による日本語会話データベース」<sup>1</sup>のコーパス・サンプルである。当コーパスは、NNSの会話能力判定方法として知られているOPIの手法を採用し、NSとNNSを対象として両者の会話データを収集、作成したものである。

本調査の結果、インタビュー形式の話しことばの「NS義務表現」と「NNS義務表現」の使用傾向に大きな違いが見られ、NNSが「NS義務表現」の形式を十分使えていないことが判明した。この結果を受け、学習者がさまざまな場面における義務表現の形式に気付く機会を中級以降に設けることを提案する。場面に応じた多様な義務表現の形式を中級以降に学習することで、日本語学習者が多様な表現形式を使えるようになるからである。また、日本語の学習が中級以上に進んでも、学習者が「初級義務表現」の形式の影響を受け、さまざまな表現形式を選び取ることができなくなる現象を「初級文型の硬直化」と呼び、最後の章でその問題について述べ、まとめとする。

## 2. 先行研究

NSの義務表現使用傾向を量的調査したものに小西(2008)がある。小西(2008)は「調査データとなるコーパスを「媒体」「場」「聞き手との相互作用」の3つの言語外的要素から規定し、具体的な出現場面から義務の表現の各バリエーションの出現傾向を記述」している。同論文は、調査結果から「音声言語のコーパスでは「なきゃ+いけない」という形式が高い確率で出現し、文字言語では「なければ+ならない」という形式が義務の表現としてほぼ固定的に使用される。」と結論付けている。本稿は、NSの義務表現の使用実態を明らかにするだけでなく、NNSの義務表現の使用実態も明らかにする必要があると考え、インタビュー形式の話しことばのコーパスを使用し、NSとNNSの使用実態の比較を行うこととした。また、本調査結果から、小西(2008)が示す「3つの言語外的要素」以外の他の要素が、義務表現の形式選択に影響を及ぼす可能性についても言及する。

## 3. 日本語教育教材の調査

### 3-1 調査方法

日本語教育機関において使用されることが多い初級の教材ベスト8(1990/3～2003/1 凡人社調べ)の中の6つの教材を対象とし、「教材作成方針(主に四技能の指導について)」と指導の対象と考えている義務表現の「初級義務表現」について調査を行った。調査対象教材は、『みんなの日本語』(以下、『みんな』)『新日本語の基礎』(以下、『新基礎』)『新文化初級日本語』(以下、『新文化』)『実力日本語』(以下、『実力』)『初級日本語げんき』(以下、『げんき』)『Situational Functional Japanese』(以下、『SFJ』)の6つである。

まず、教師用指導書や教科書の使い方などに述べられていることを中心に調べ、主に四技能の指導の方針を探る。「教材作成方針(主に四技能の指導について)」の調査について

は3-2で述べる。「初級義務表現」の調査は、上記の教材の中の教科書に対象を絞り、導入文型や参考文型（中心的な文型ではないが、参考として挙げられている文型）の形式について調査を行った。「初級義務表現」についての調査結果は3-3で述べる。

### 3-2 日本語教育教材の教材作成方針

本節では、それぞれの教科書・教材の四技能の指導に対する考え方や教材作成の方針などについての調査（以下、教材調査）結果を分析する。

『みんな』の教師用指導書『初級 I 教え方の手引き』の編集方針には「会話力の育成のために「話す」「聞く」の練習が中心になっているが、入門期の段階（第6課以降各課）から「読む」問題を加え、『みんなの日本語初級 I・II』を終えた段階では、読み書きにも重きをおく中級への学習が無理なく展開できるように工夫してある。」(p.2)と書かれている。

一方、『新基礎』の教師用指導書では「この教科書は初級学習者の会話力の育成を目的とするもので、読み書き指導は考慮の外にある」(p.6)と書かれており、「話す」「聞く」学習のための教科書であることが明示されている。

『新文化』は本冊の巻頭「1. 本書の特徴について」の中で「第一に、文法を体系的に習得し、将来高等教育を受けるに足る高い応用力を積み上げられるような土台を作ること、第二に、日本の生活で日々直面する場面でコミュニケーションができるようにすることである。」(p.6)と述べている。

『実力』は文法解説書で、「話す」「読む」能力を伸ばすことを目的としていることが書かれている。「話す」能力については、「基礎会話」において会話使用例を提示しており、「縮約形の混じった会話独特の表現を提示し、積極的に「ダ体」扱うように」(p.5)している。また、「談話構造練習」で「会話文」と「独話文」に形式を分けて導入していることが書かれており、他の教材に比べて、さらに「話す」能力を伸ばす内容のものとなっている。

『げんき』は本冊の「本書について」において「総合教材として、日本語の四技能（聞く、話す、読む、書く）を伸ばし、総合的な日本語の能力を高めていくことを目標としています。」(p.8)と述べている。また、『げんき』の教師用指導書『げんき・教師用指導書』では、各課に「会話・文法編」と「読み書き編」を設けていることが述べられている。『げんき』は調査対象教材の中で四技能を学習する目標を明確に述べている唯一の教材である。

『SFJ』は、本冊「I SFJの使い方」において「日常生活にとりあえに必要な日本語力をつけるだけでなく、その後に続く研究活動や日本人との深い付き合いに役立つ、さらに高度な日本語力の基礎を作るという目標からも最適な学習ができるようにデザインされています。」(p.3)と述べており、特に「話す」能力に関しては、「自然な日本語のモデル」(p.3)を採用し、できるだけNSの自然な日本語に近い表現を学習できるようにしている。また、付属教材のドリルや Report など無助詞や縮約形ではない書きことばとしての学習も用意されている。

以上、6つの教材の調査結果より、どの教材も「話す」能力に重点を置きながら、「新基礎」以外は、中級以降の学習の土台を築くために他の三技能についても学習できるよう

な教材作成を目指していることがわかる。

### 3-3 日本語教育の教科書における「初級義務表現」の調査

本節では、6つの調査対象の教科書で取り上げられている「初級義務表現」の形式について調査（以下、教科書調査）を行う。教科書調査の項目として挙げた「初級義務表現」の形式は教科書調査の結果から得られた7項目である。それぞれの項目について、普通体（例：～ナケレバナラナイ）と丁寧体（例：～ナケレバナリマセン）を調査した。なお、便宜上、調査項目の名称は普通体の名称とし、調査項目の形式を教科書調査では「文型」と称する。「初級義務表現」の教科書調査の結果から、6冊中4冊の教科書が導入文型として「①～ナケレバナラナイ」を採用していることがわかる。各教科書が導入または参考として提示する「初級義務表現」の文型の調査結果については【表1】を参照されたい。

【表1】「初級義務表現」の7つの文型と各教科書の導入文型と参考文型の調査結果

「初級義務表現」文型	『みんな』	『新基礎』	『新文化』	『実力』	『げんき』	『SFJ』
①～ナケレバナラナイ	17課 (138)	17課 (136)		34課 (34)		34課 (188-189)
②～ナケレバイケナイ						34課 (188-189)
③～ナキヤナラナイ						
④～ナキヤイケナイ						
⑤～ナイトイケナイ	17課 (138)	17課 (136)				
⑥～ナクテハイケナイ			20課 (26)	34課 (34)	12課 (233)	34課 (188-189)
⑦～ナクチャイケナイ					12課 (233)	34課 (188-189)

(注) 灰色の箇所が導入文型で、その他は参考文型、空欄は提示がなかった文型。( )内の数値はページ数を示す。

## 4. インタビュー形式の話しことばコーパスのデータにみる義務表現の使用傾向

### 4-1 義務表現に関する調査の方法

インタビュー形式の話しことば（同条件下でインタビューを受けたNS50名とNNS50名の話しことば。インタビューアーの発話は除いた。）コーパスのデータを使用し、データ中の話しことばにおける義務表現の使用傾向を分析することを目的とする。調査項目としての義務表現は、前章の教科書調査に用いた「初級義務表現」の7文型を使用し、それぞれの文型について、普通体（例：～ナケレバナラナイ）と丁寧体（例：～ナケレバナリマセン）の用例数を調査した。「初級義務表現」と形式が異なる「～なきやまずい」「～ないとだめだ」「～なきやっていう感じ」などの形式は「⑧その他」に分類し、「～なければならなかった」などの活用のバリエーションや「なきやいけないんですよ」などのノダや終助詞が付与された表現については、「初級義務表現」と判断し、該当する文型に分類した。

なお、本調査に使用したコーパスにはNNS被験者の日本語学習レベルは示されていない。

かった。OPIの手法を採用したインタビュー形式ではあったが、コーパスの中には音声含まないデータもあったため、本来のOPIの手法でNNSの日本語学習レベルを判定することは困難であると判断した。そこで、NNS被験者の日本語学習レベルを知るため、被験者の発話データをもとに日本語教育経験者3名（初級・中級・上級レベル、すべてのレベルの教授経験を持つ）で協議を行い、被験者の日本語学習レベルを初級・中級・上級・超級の4段階に分類した。結果は、初級2名、中級11名、上級4名、超級3名であった。

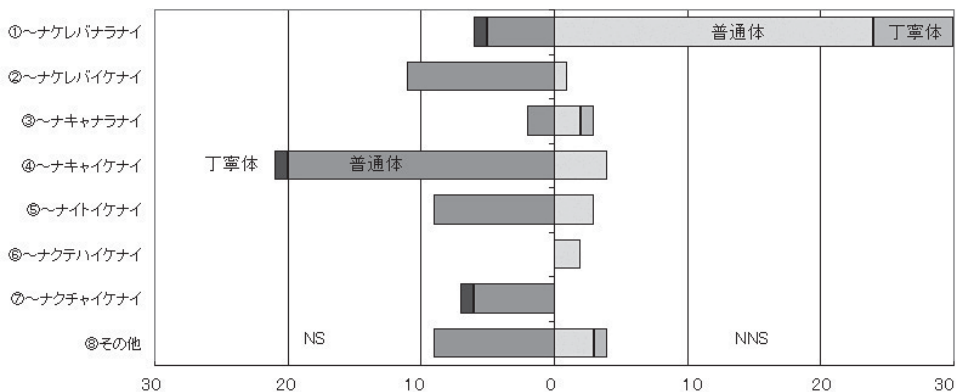
#### 4-2 「NS 義務表現」「NNS 義務表現」のコーパス調査結果

「NS 義務表現」「NNS 義務表現」コーパス調査結果が【表2】および【図1】である。

「NS 義務表現」の全用例数は65例で、一番多く見られた形式は「④～ナキヤイケナイ」21例、次いで「②～ナケレバイケナイ」11例である。「⑧その他」の内訳は、表現の一部に～ナキヤ使用が3例、～ナケレバ使用が1例で、～ナイト使用が4例、～ナクチャ使

【表2】「NS 義務表現」「NNS 義務表現」のコーパス調査結果

「初級義務表現」	「NS 義務表現」用例数				「NNS 義務表現」用例数			
	普通体	丁寧体	計		普通体	丁寧体	計	
①～ナケレバナラナイ	5	1	6	(9.23%)	24	6	30	(63.83%)
②～ナケレバイケナイ	11	0	11	(16.92%)	1	0	1	(2.13%)
③～ナキヤナラナイ	2	0	2	(3.07%)	2	1	3	(6.38%)
④～ナキヤイケナイ	20	1	21	(32.31%)	4	0	4	(8.51%)
⑤～ナイトイケナイ	9	0	9	(13.85%)	3	0	3	(6.38%)
⑥～ナクテハイケナイ	0	0	0	(0.00%)	2	0	2	(4.26%)
⑦～ナクチャイケナイ	6	1	7	(10.77%)	0	0	0	(0.00%)
⑧その他	9	0	9	(13.85%)	3	1	4	(8.51%)
計	62	3	65	(100.00%)	39	8	47	(100.00%)



【図1】「NS 義務表現」「NNS 義務表現」のコーパス調査結果（\*数値は用例数）

【表3】「NNS義務表現」学習レベル別調査結果

(普：普通体、丁：丁寧体)

	初級 (3名)	中級 (11名)	上級 (4名)	超級 (3名)
①～ナケレバナラナイ	3 (普2・丁1)	17 (普15・丁2)	3 (普2・丁1)	7 (普6・丁1)
②～ナケレバイケナイ			1 (普1)	
③～ナキヤナラナイ		3 (普2・丁1)		
④～ナキヤイケナイ		1 (普1)	1 (普1)	2 (普2)
⑤～ナイトイケナイ			2 (普2)	1 (普1)
⑥～ナクテハイケナイ		2 (普2)		
⑦～ナクチャイケナイ				
⑧その他		1 (丁1)		3 (普3)
計	3	24	7	13

(\*数値は用例数)

用が1例、合計9例である。9例のうち、「～ナキヤあ、まずい」<sup>2</sup>の1例「～ナイトだめ」の3例を除き、他は全て後半が省略の形式で、省略の形式はすべて普通体の中に含めた。

「NNSの義務表現」の全用例数は47例で、一番多く見られた形式は「①～ナケレバナラナイ」30例である。また、「NNSの義務表現」の「⑧その他」は4例で、形式は「～ナイトだめだ」の丁寧体1例と「～ナクチャならない」普通体1例、「～ナクチャなんない」の普通体2例である。

「NNS義務表現」使用傾向を日本語学習レベル別にみたものが【表3】である。初級から超級、全てのレベルにおいて、一番多く使用されている形式は「①～ナケレバナラナイ」であることがわかる。

#### 4-3 「NS義務表現」コーパス調査結果の分析

【表2】および【図1】から、NSは縮約形を多用していることがわかる。調査対象となったデータはOPIという方法によって採られたもので、インタビュー形式の発話が中心となっている。インタビューにもさまざまな形式が考えられるが、被験者にできるだけ自由に語らせるというOPIの手法上の性質が、「改まり」をあまり感じさせることなく、被験者の縮約形の多用を可能にしたと思われる。また、日本語教育の教科書で多く取り上げられている「①～ナケレバナラナイ」は、「NS義務表現」では用例数が6例と少ないことがわかった。日本語教育の口頭練習に多く使用されるマス形の～ナケレバナリマセンについては、NSの使用は1例のみである。「①～ナケレバナラナイ」のNSの使用例を以下に挙げる。なお、(1:)の発話はインタビューアーのものである。

- 1) 「病院に付き合わなければならなくなりました。… (略) …夜、電話します。」(留守番電話に残したメッセージ)



- 2) 「やはり、現地の、ま、アメリカの人を雇用しなければならない。(1: うんうん) ま、そうしますと、ま、あの一日本の雇用体系とアメリカの雇用体系、もちろん体系に一つ違いがあります。」(日米の職場環境比較に関する話題について話す被験者が、発話の中で使用したもの)

1) のような留守番電話のメッセージは、音声言語であるにもかかわらず、伝言メモのような形式、すなわち書きことばに近いものになることがある。このため、「①～ナケレバナラナイ」の丁寧体が使用されたと思われる。2) のような話題の場合は、社会問題の論説文などによくみられる義務表現が使用されている。身近な話題ではなく、社会問題などを話題にする場合は、縮約形を使用するよりも「①～ナケレバナラナイ」の方がふさわしいと発話者が判断したのであろう。一方、NSが自身の体験など身近な話題について述べる場合、「NS 義務表現」の多くは縮約形が出現している。縮約形の使用例を以下に挙げる。

- 3) 「あ、やっぱり一人暮らしというのは、いいなあと思う所もありますが (1: ええ。) すべて自分で (1: ええ。) やらなきゃいけないってするので、やはり私には無理かなと思います。」(一人暮らしに関する話題)
- 4) 「あの一、／ほんとに済みませんけど、あの一、ちょっと今ね、すごく、難しい本読んでて、あの一、／集中しなくちゃいけないんだけど、ごめんなさい、ちょっと、ピアノの音を、小さく出来るかなあ。」(「騒音への苦情」のロールプレイ)
- 5) 「ええ。ですから一まああの一それを一回やって続けなきゃいけないとかっていう気持ちもございませんし (1: うんうん) あの一やはりしたい時にはやっぱりあの一形を変えてしてと思います」(お中元など贈答に関する話題)

4) の例のようなロールプレイでは、インタビューの場面ではない日常生活の特定の場面で被験者がどのような発話を想定するかを知ることができる。ロールプレイは自然談話ではないが、自然談話のような個別の文脈がない状況で、被験者から特定の場面に対して一般的と考える回答を得ることができるという点で重要であるといえよう。

5) の例を見ると、被験者は「ごぞいます」などの表現を使用しており、インタビューを「改まりの場」として捉えているようである。しかし、同時に縮約形を使用している点は興味深い。「改まり」があると判断している場面で縮約形が出現可能であるということは、縮約形があらゆる話しことばに浸透していることを指し示しているといえる。

#### 4-4 「NNS 義務表現」コーパス調査結果の分析

【表2】および【図1】から、NNSは「①～ナケレバナラナイ」を多用していることがわかる。インタビュー形式ということから、「改まり」を感じた結果とも考えられるが、NSが縮約形を多く使用している結果とは対照的である。「NNS 義務表現」の6割以上が

日本語教育の「初級義務表現」で多く採用されている形式の「①～ナケレバナラナイ」と一致している点も興味深い。

また、【表3】より、NNSの「①～ナケレバナラナイ」の使用は、初級レベルから超級レベルまで幅広く現れていることがわかる。NSの使用傾向との大きな違いは、NNSが身近な話題であるにもかかわらず、「①～ナケレバナラナイ」を使用している点である。超級レベルでは、NSと同様、社会問題を話題にしたときの使用も見られ、NSの使用例に近い例もあったが、一方で身近な話題についての使用も見られた。以下にNNSの「①～ナケレバナラナイ」の使用例を挙げる。

- 6) 「あ、はい。えーと、うちの大学ー、国際関係大学だから、(1: うん、うん) その、みんな、あー、／入る時、(1: うん) なんか、あ、二つの、(1: うん) 外国語の勉強しなければならない。」(被験者の大学生活についての話題)
- 7) 「(1: 遊んだりっていうのは、なにをして。) まあ映画を、みに (1: ああ、はあはあ) みに行ったりー、テレビをみたり (1: ふーん) 散歩をしたりして、(1: ふーん) うん、いつも、あの一僕は、仕事のために、あの考え、よく、考えなければならないいんですから、(1: 仕事のためって。) 仕事は一、あの一、日本の歴史ですね。(被験者の余暇の過ごし方についての話題)
- 8) 「2: はい、はい、あります (1: んー)。あの、コペンハーゲンから (1: ええ) SISに乗れば (1: ええ) あの、もっと早く、できると思いますが、(1: ええ) 私、え、あの、お金持ちではないので、あの、エルポートに乗って、(1: あー) あの、それでモスクワによらなければなりません。」(被験者が乗る飛行機の話題)

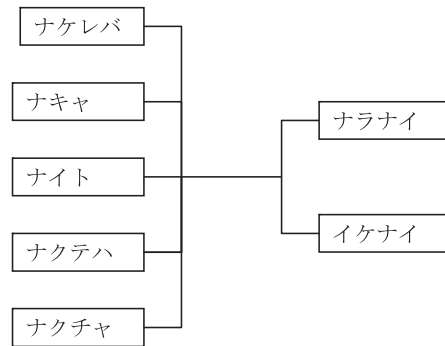
NSが身近な話題について話す場合、そのほとんどが③・④の～ナキャ、または、②・④・⑤・⑥・⑦のような後半部分が～イケナイという形式を使用していることと比べると大きな違いがある。また、「①～ナケレバナラナイ」のノダ文がうまく使われていないということも分かった。NNSの多くが選択した形式「①～ナケレバナラナイ」は、堅苦しい印象を人に与え、時として日本語の学習があまり進んでいないという印象も与える。

#### 4-5 「初級義務表現」の構造からみた NS と NNS の調査結果

本節では、コーパス調査の対象となった「初級義務表現」の7文型が【図2】のような構造を持つと考え、文型の前半部分と後半部分に分けてコーパス調査の結果を分析した。

「初級義務表現」文型の形式の前半部分に着目し、前半部分が～ナケレバであるものを～ナケレバ系 (NNSに最も多い①②と⑧の一部の形式)、前半部分が～ナキャであるものを～ナキャ系 (NSに最も多い③④と⑧の一部の形式)、「⑤～ナイトイケナイ」などその他の表現系 (⑤～⑦と⑧の一部の形式) に分類すると、「NS義務表現」の使用例は三つの系列にほぼ等しく分けられることがわかった。「NS義務表現」「NNS義務表現」の使用例を三つの系列に分類すると【表4】のようになる。





【図2】「初級義務表現」の構造

【表4】 ナケレバ系・ナキャ系・その他の表現系 の使用傾向

「NS 義務表現」の使用傾向（用例数）				「NNS 義務表現」の使用傾向（用例数）			
ナケレバ系	ナキャ系	その他の表現系	計	ナケレバ系	ナキャ系	その他の表現系	計
18 (27.7%)	26 (40.0%)	21 (32.3%)	65 (100.0%)	31 (66.0%)	7 (14.9%)	9 (19.1%)	47 (100.0%)

【表5】 イケナイ系・ナラナイ系・その他の表現系 の使用傾向

「NS 義務表現」の使用傾向（用例数）				「NNS 義務表現」の使用傾向（用例数）			
イケナイ系	ナラナイ系	その他の表現系	計	イケナイ系	ナラナイ系	その他の表現系	計
48 (73.8%)	8 (12.3%)	9 (13.9%)	65 (100.0%)	10 (21.3%)	34 (72.3%)	3 (6.4%)	47 (100.0%)

次に、形式の後半部分に焦点を当て、イケナイとナラナイの形式の使用傾向についてみる。形式の後半部分がナラナイであるものをナラナイ系（①③の形式）、後半部分がイケナイであるものをイケナイ系（②④⑤⑥⑦）とし、後半部分が省略されているものやその他の形式のものはその他の表現系として三つの系列に分類した。「NS 義務表現」「NNS 義務表現」の使用例を三つの系列に分類すると【表5】のようになる。

文型前半部分の形式の使用傾向（【表4】参照）をみると、NSはナキャ系が40%を占めており、NNSはナケレバ系が66%を占めている。この結果を踏まえ、実用的な話しことばとして、日本語教育に縮約形を積極的に導入することも考えられる。一方、NSの約28%のナケレバ系の中で大半を占めているのが、～ナケレバイケナイの形式である。NSの約32%を占めるその他の文型～ナイトイケナイ・～ナクテハイケナイ・～ナクチャイケナイも同様に後半の部分がイケナイという形式のものである。このことから、文型の後半部分イケナイに着目することも重要であることがわかる。次に、文型後半部分の形式の

使用傾向（【表5】参照）について考察する。NSの約74%がイケナイ系を使用しており、イケナイ系が「NS義務表現」の主流になっていることがわかる。一方、「NNS義務表現」の約72%がナラナイ系であり、NSの調査結果と対照的な結果となっている。

すなわち、これらの調査結果から言えることは、インタビュー形式の話しことばにおいてNSの典型的な義務表現をNNSの大半が使用していない。NNSが主に使用する義務表現は、日本語教育で教授されることが多い「初級義務表現」の形式と一致している。NNSの使用する義務表現は、NSの使用頻度が低い形式であるということである。以上の結論から、実用的な話しことばとして、日本語教育に「④～ナキヤイケナイ」、「②～ナケレバイケナイ」、「⑤～ナイトイケナイ」などの文型を積極的に取り入れることも考えられるであろう。本調査のNNSは初級から超級と呼ばれる被験者が対象であるが、中級以上になると、表現形式使用の多様性が期待されることを考えれば、本調査のNNSの表現形式はNSの表現形式に比べて、多様性がみられなかったといえる。「NSが一番多く用いている表現形式をNNSが使用すること」の必要性も認めるが、さらに重要なことは、中級以降に義務表現を柔軟に使い分ける能力を身に付けることではないであろうか。

## 5. 「初級義務表現」にみる「初級文型の硬直化」の問題と今後の課題

コーパスの調査結果から、インタビュー形式の話しことばにおいてNSが主に使用する義務表現形式は、「④～ナキヤイケナイ」であることが判明し、小西（2008）の調査結果と一致した。また、3-3教科書調査結果とコーパスの調査結果から「初級義務表現」の文型が「①～ナケレバナラナイ」の形式を主に採用していること、話しことばにおけるNNSの義務表現の形式が、「①～ナケレバナラナイ」に偏る傾向をみることができた。本稿はこの問題を義務表現の「初級文型の硬直化」と考える。

「初級文型の硬直化」は、遠藤（2008）では「初級で既習の文型について、その時点で教授・学習した意味・用法がすべてであると、教師や学習者、またはその両者が思い込んでしまい、より高度な運用能力が発揮できる中・上級になっても、初級で教え、教わった以外の意味・用法に注意を向けさせることも、自主的に注意が向くこともなくなる現象」（下線は筆者）を指しているが、本稿は「初級で既習の文型について、教師や学習者、またはその両者が、初級で教え、教わった以外の形式に注意を向けさせることも、自主的に注意が向くこともなくなる現象」<sup>3</sup>も「初級文型の硬直化」ではないかと考える。

「初級文型の硬直化」がおこる原因として、教材の作成方針や導入、練習の仕方などでの問題が考えられる。3-2教材調査では、『新基礎』以外の教材が中級以降も発展的な学習を継続することを目標に掲げながら、その目標を見据えた上での初級の学習項目の選択をしていないことが判明した。そのため、初級で取り上げられる「話しことばとしてやや不自然な文型」はコーパスの調査結果からも明かなように、初級はもちろん中級以上になっても保持されるのである。

『みんな』や『新基礎』では、「実践的会話能力養成」を目標にあげながら、実際のNSの会話に多く見られる義務表現の形式とは異なる形式を指導している。一方、『げんき』や『SFJ』は縮約形などNSの自然な発話の文型を初級から積極的に導入している。しか

しながら、中級以降は、「書く」とき「話す」ときの場面の多様性なども考えていかなければならない。例えば、『SFJ』の23課の[書きタスク]にあるように、「義務の表現を使った作文を書く」場合の表現形式は、「助詞を使用する」、「縮約形を使用しない」などの注意とともに、書く内容や媒体によって使用する文型の傾向なども指導する必要がある。友だちに送るメールと、社会的な問題について論じるレポートなどでは表現形式も変わるからである。初級で作文を書かせることはよくある指導法の一つであるが、由井(2005)は「これまでの作文教育が「書く」コミュニケーションが持つ「場面性」を欠いて行われてきたということは、対人上の配慮に関する意識化も不十分になってしまうことにもつながる。学習者が実生活上で書いた不自然な日本語を生む」とし、「相手や媒体に応じた内容の選択というのが「書く」教育においてはもっとも重要なのである」とも述べている。また、「書く」だけでなく、「話す」場合も、大勢の人に向かって発表する場面、友人との雑談などの場面、というようにさまざまな場面に応じた内容や表現形式の選択も重要であろう。もし、初級でこのような指導が不可能であるならば、中級以降にもう一度取り上げることも考えてよいのではないだろうか。「それぞれのコミュニケーション活動に必要な文法にする必要がある」(野田 2005:7) ように、日本語教育で取り上げる文型もさまざまな場面に応じて使い分ける指導を考えていく必要があろう。では、さまざまな場面とは、どのように規定されるのであろうか。

小西(2008)は「話しことば／書きことば」「くだけている／改まっている」「音声／文字」という単独のラベルでは、言語の運用実態を説明することが難しいため「「媒体」「場」「聞き手との相互作用」という言語外的要素において異なった」さまざまな場面での表現形式の使い分けなども考慮する必要があると述べている。しかしながら、以上の三つの言語外的要素だけでは十分であるとはいえない。本調査のコーパスのデータにおいて、インタビューの際、自分の身近な話題に関しては、縮約形など話しことばによく使われる表現を使用する現象が見られる一方、経済や文化などの社会的な話題に言及する場合、書きことばに近い表現を使用するという現象も見られている。この調査結果は、義務表現の形式の選択の際に、上記の三つの要素以外に「どのような話題であるか」ということも考慮する必要があることを示しているといえよう。

以上、「初級文型の硬直化」を引き起こさないために、教材作成方針を立てる際、留意すべき点について述べた。本調査対象の義務表現について見れば、NSとNNSの使用傾向に大きな差があったように、学習者であるNNSが「①～ナケレバナラナイ」という表現形式に偏るという結果となっている。本稿は、この結果を受け、学習者に初級文型を応用した表現の使用を促すためにも、中級以降で再び初級文型を発展的に学習させることを提案する。中級以降の発展的な学習とは、義務表現だけを学習項目として立て、中級以降も継続学習するという意味ではなく、中級以降の会話やスピーチ、レポート作成などの授業で義務表現の不適切な使用が見られた場合に、適切なフィードバックとともに、その場で学習者に使い分けを意識させるということである。

3-3の教科書調査結果【表1】でも明らかなように、導入文型と参考文型はすべて同じ課で提示されている。初級の段階では、教師も学習者も導入文型に注意を向けることが多く、参考として提示される文型がどのような場面、文脈で使用されるかについて考える余

裕もなく、再び取り上げることも少ない。それらの文型はただ提示されているだけで、学習効果が得られないことも多い。また、初級段階でのインプットは学習者の負担を考えて、限定された文脈、限定された形式で行われることが多いため、さらに学習者の使用できる形式は限られたものとなる。このように現行の日本語教育では、「初級で学習したものは初級で終わる」という考え方が中心で、教師も学習者も初級文型の多用な表現の形式を意識する機会を持つことが難しいのである。

本稿が取り上げている義務表現のように、さまざまな形式を持つ初級文型だけでなく、さまざまな意味・用法を持つ初級文型もあるが、現状では初級段階の学習で取り扱うことができない。このように学ぶ機会がない、または余裕がなかった形式・意味・用法についての学習を中級以降で行うことは、中級以上の学習者の表現形式をより豊かなものにするであろう。

川口（1996）は日本語教育において表現に関わる言語資料を提示するとき、教授者はその構成要素である「内容」「形式」「意図」「資格」をできるかぎり具体的に示さなければならぬとし、上記の表現における構成要素の明示を「文脈化」と呼んでいる。同論文は「従来の教材・教授法でも、言語資料の「内容」と「形式」は与えられてきたが、「その内容は、なぜその形式で行わなければならないのか」、あるいは「その表現は、だれがだれに向かって、何のためにするか、そしてしてもよいのか」ということが欠如した教材がある」と述べている。中級、上級と学習段階が進むにつれて、学習者が発話する際に考慮しなければならない言語外的要素がより多く、より複雑になることを考えると、川口（1996）が指摘するように様々な構成要素を具体的に取り入れた指導を、中級以上はもちろんのこと、初級から実践することも重要であり、義務表現以外のあらゆる文法項目について「文脈化」する姿勢を、教師は持つ必要があるといえよう。

「初級文型の硬直化」を防ぐためには、教材の作成方針に留意するだけでなく、教師側の意識改革もまた必要なのである。

今回は、NSとNNSの義務表現の形式選択の傾向をインタビューのコーパスのデータを用いて調査し、「初級文型の硬直化」の観点から分析を行った。本調査は初級文型の中の一つである義務表現に関する調査であり、インタビューという場面における応答の中の話しことばの調査である。したがって、あらゆる場面の話しことばにおける傾向を示すものではない。しかしながら、本調査で使用したコーパスは、インタビューという同じ場面の中でNSとNNSの表現形式使用の傾向を比較するのに適したものであったと考える。今後は、インタビュー以外の話しことばコーパスや書きことばコーパスを用いて、「NS義務表現」および「NNS義務表現」の使用傾向、そのほかの初級文型についても調査を行いたい。

## 注

- 1 『平成8－10年度文部省科学研究費補助特定領域研究「人文科学とコンピューター」公募研究（日本語会話データベースの構築と談話分析）研究代表者上村隆一）の成果による』
- 2 「～ナキャあ、まづい」などのカタカナとひらがなで表した形式は「初級義務表現」の分類では

- 「⑧その他」に分類され、構造を前半と後半に分けて考えて分類する場合（4－5参照）では、前半のカタカナの部分「ナキャ」があるため、「ナキャ系」に属するものであることを示している。
- 3 本稿が示す義務表現の例とはパターンが異なるが、アドバイスの場面で～ハウガイイを初級で学習すると、あらゆるアドバイスの場面において～ハウガイイという一つの形式で済ませようとする学習者がみられる問題も「初級文型の硬直化」すなわち「形式の硬直化」ではないかと考える。

## 調査資料

- Situational Functional Japanese Vol. 3（2003）凡人社  
 Situational Functional Japanese 教師用指導書（2000）凡人社  
 実力日本語（下）（2000）アルク  
 実力日本語（下）単語・文法解説書（2000）アルク  
 初級日本語「げんき」1（1999）The Japan Times  
 初級日本語「げんき」教師用指導書（2000）The Japan Times  
 新日本語の基礎Ⅰ本冊 漢字かなまじり版（1990）スリーエーネットワーク  
 新日本語の基礎Ⅰ教師用指導書（1992）スリーエーネットワーク  
 新文化初級日本語Ⅱ（2000）凡人社  
 新文化初級日本語Ⅱ教師用指導手引書（2000）凡人社  
 みんなの日本語 初級Ⅰ本冊（1998）スリーエーネットワーク  
 みんなの日本語 初級Ⅰ教え方の手引き（2000）スリーエーネットワーク  
 「インタビュー形式による日本語会話データベース」『平成8－10年度文部省科学研究費補助特定領域研究「人文科学とコンピューター」公募研究（「日本語会話データベースの構築と談話分析」研究代表者上村隆一）の成果による』

## 参考文献

- 遠藤直子（2008）「日本語学習者による初級文型～テモイイのとらえ方について―「初級文型の硬直化」の問題から―」『日本語教育』137号、日本語教育学会、pp. 21-30  
 川口義一（1996）「日本語指導の文脈化」『日本語教育・異文化間コミュニケーション』、北海道国際交流センター pp. 69-87  
 小西 円（2008）「実態調査からみた「義務表現」のバリエーションとその出現傾向」『日本語教育』138号、日本語教育学会、pp. 73-82  
 野田尚史（2005）「コミュニケーションのための日本語教育文法の設計図」野田尚史編『コミュニケーションのための日本語教育文法』、くろしお出版、pp. 1-20  
 由井紀久子（2005）「書くための日本語教育文法」野田尚史編『コミュニケーションのための日本語教育文法』、くろしお出版、pp. 187-206